

[実践研究]

振り返りと安心して話せる場作りを重視した 日本語科目の実践研究

— 敬愛大学の留学生教育に今後必要なこと

長谷川 頼子・井上 里鶴

1. 本研究の目的

敬愛大学では、毎年、国際学部および経済学部で留学生の受け入れを行っている。現在の入学定員は国際学部 20 名、経済学部 10 名である。一方で、入学する留学生数は、さまざまな要因を背景として年度によって変動がある。長谷川（2023）で示したように、2000 年代に本学は留学生の受け入れを積極的に進め、結果として入学者に占める割合がきわめて高い状態が続いたが、2010 年代以降下降傾向に転じた。以下の図 1 は長谷川（2023：29）による。

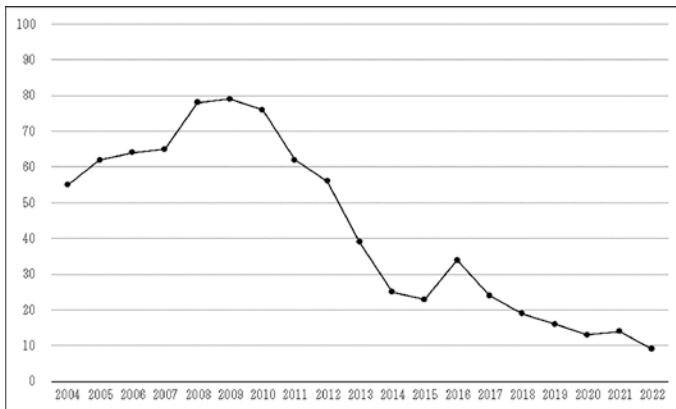


図1 国際学部入学者における留学生数の割合（2004～2022年度、単位％）
（長谷川2023：29）

本研究が対象とする 2023 年度に関しては、新型コロナウイルス感染症による国内留学生数の激減の影響を非常に大きく受け、入学した留学生はわずかに国際学部 6 名、経済学部 2 名と、これまでに経験したことのない少人数となった。しかし、2024 年度には大学全体で 30 名近くの留学生が本学に入学し、留学生数の割合は再度増加に転じる見込みである。

問題となるのは、日本人学生の場合と違って、個々の留学生の出身国や文化的背景、教育的背景、また経済的状況、大学生活に対する意識がそれぞれに異なるということである。それに加えて、入学時の留学生の日本語レベルには個々に大きな差が存在している。一人ひとりがそれぞれに異なる背景をもつ留学生を受け入れることは、大学として大きな責任を負うことである。受け入れる留学生数が増加すれば、留学生の実態について教職員間で「共有」し、「知る」という行動がこれまで以上に必要となる。それだけに、入学した 1 年次での教育や対応はきわめて重要である。留学生に 4 年間で何を修得させたいのか、どんな学びの機会を提供するのか、将来の出口に向けて何を準備するのか、大学としての方針を打ち出すことは不可欠だろう。敬愛大学の留学生教育について、家近（2023）においても「留学生に対する教育は、一貫して取り組んできた大きな課題である」と述べている。加えて、土弘・工藤（2023）においても、日本の留学生政策の現状と課題を整理した上で、留学生の就職支援の必要性を論じている。

そこで本研究は、2023 年度国際学部開講の日本語科目「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」の実践を通じて、本学の留学生がおかれている実態を記述することと、それを受けて、これからの留学生教育や留学生への対応において取り組むべき課題を明らかにすることを目的とする。

2. 日本語科目「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」の概要

留学生は、1 年次で週 2 回の日本語教育を受ける。それが前期開講日本語科目「日本語Ⅰ」および後期開講の「日本語Ⅱ」である。2023 年度からは国際学部、経済学部の留学生 1 年生が合同で「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」を受講している。前章で述べた通り、本学は留学生に一定の人数の入学を

認めている。特に、国際学部では、留学生と日本人学生がともに学び、お互いの言語や文化を尊重しながら交流することの意義を重視して、積極的に留学生の受け入れを進めてきた。

筆者らは、本学に入学した留学生に授業を通して密着し、彼らの学びに向かう姿勢や、大学生活で何に直面しているか、実態を明らかにすることが第一に必要だと考える。この立場にもとづいて、「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」の授業設計を行う際には、留学生に直接関わる者として何を大切にすることを担当者間で検討した。

2.1 シラバス

本学の入試要項では出願資格の一つとして日本語能力試験 N2 レベル相当としているが、全体的に、留学生の入学時の日本語能力はそこに十分達していないものが多い。そこで、2023 年度「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」では、日本語能力試験 N1（以下 N1 とする）レベルの日本語力を付けることを目標とした。

ここでは、「日本語Ⅱ」のシラバス内容を抜粋して紹介する。以下図 2 の通りである。

なお、各曜日のクラスは、通年で同じ教員が担当した。木曜日 5 限は N1 の「文法」「読解」分野、金曜日 1 限は、N1 の「語彙」「聴解」分野を扱った。

授業のねらい・到達目標・実務経験と授業の関連性・DP, CPに於ける位置づけ

この授業では、日本語能力試験（JLPT）N1レベルの日本語能力を身につけることを目標とします。N1合格を目指して、文字・語彙、文法、読解、聴解の各パートをバランスよく学習します。予習・授業・復習の流れの中で繰り返し学ぶことで、学習内容の定着を図ります。授業の場以外に受講者とやりとりできる仕組みを作り、一人一人が弱点を克服し、日本語能力試験に向けた準備を進められるよう教員がサポートします。N1レベルの日本語を習得することによって、大学で展開される2年次以降の専門科目の内容理解や、将来の進路選択に向けて一人一人が自信をつけられるようにします（CP、DP1, 3）。

授業の進め方（履修条件、試験やレポートなど課題のフィードバック方法を含め）

この授業では、毎回復習を兼ねた小テストを実施します。日本語能力試験N1対策の教科書を使用し、文字・語彙、文法、読解、聴解の各パートについて、授業でたくさん問題に取り組みます。そして、できなかったところを自分でマークし、調べたり、確認したりする作業をします。また、定期的に模試を実施したり、まとめのテストを行います。受講者は、必ず次の日本語能力試験N1を受けてください。

アクティブ・ラーニングの手法

対面授業において、授業内活動が十分可能な場合には、周囲の人とのペアワークやグループワークを行う可能性があります。

授業の予習・復習（1授業に必要とする事前事後学習の内容と時間数を含め）

毎回、小テストを行います。小テストは「日本語N1総まとめ」（前期「日本語Ⅰ」教科書）から出題しますので、よく復習しておいてください（60分）。その中で、忘れてしまったり、わからない箇所にはあらかじめマーカーでチェックしておいてください（30分）。授業の後には、振り返りシートの記入によって学習内容を整理したり、自分の学習を省みる時間を持って下さい（60分）。また、連絡ツールを使って質問したり、他の受講者の質問に答えたりして下さい（30分）。

教科書、ISBN

五十嵐香子・佐藤茉奈花・金澤美香子・杉山舞・植村有里沙（2021）『全科目攻略！ JLPT 日本語能力試験ベスト総合問題集 N1』ジャパン・タイムズ ISBN：978-4-7890-1787-7

授業項目 授業内容

- | | |
|-----------|--|
| 第1回（金曜①） | 文字・語彙、聴解、前期の振り返り、後期の授業の進め方、教科書の使用方法 |
| 第2回（木曜①） | 文法、読解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第1回（文法、読解）と解説 |
| 第3回（金曜②） | 文字・語彙、聴解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第3回（文字・語彙、聴解）と解説 |
| 第4回（木曜②） | 文法、読解 第3週：文法形式の判断・文の組み立て |
| 第5回（金曜③） | 文字・語彙、聴解 第1週：漢字読み・文脈規定 |
| 第6回（木曜③） | 文法、読解 第4週：文章の文法 |
| 第7回（金曜④） | 文字・語彙、読解 第2週：言いかえ類義・用法 |
| 第8回（木曜④） | 文法、読解 第5週：内容理解（短文） |
| 第9回（金曜⑤） | 文字・語彙、聴解 第9週：課題理解・ポイント理解 |
| 第10回（木曜⑤） | 文法、読解 第6週：内容理解（中文） |
| 第11回（金曜⑥） | 文字・語彙、聴解 第10週：概要理解 |
| 第12回（木曜⑥） | 文法、読解 第7週：内容理解（長文）・統合理解 |
| 第13回（金曜⑦） | 文字・読解、聴解 第11週：即時応答 |
| 第14回（木曜⑦） | 文法、読解 第8週：主張理解（長文）・情報検索 |
| 第15回（金曜⑧） | 文字・読解、聴解 第12週：統合理解 |
| 第16回（木曜⑧） | 文法、読解 中間テスト（文法、読解） |
| 第17回（金曜⑨） | 文字・読解、聴解 中間テスト（文字・語彙、聴解） |
| 第18回（木曜⑨） | 文法、読解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第2回（文法、読解）と解説 |
| 第19回（金曜⑩） | 文字・語彙、聴解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第2回（文字・語彙、聴解）と解説 |
| 第20回（木曜⑩） | 文法、読解 第5・6・7・8週（読解）① |
| 第21回（金曜⑪） | 文字・読解、聴解 第9・10・11・12週（聴解）① |
| 第22回（木曜⑪） | 文法、読解 第5・6・7・8週（読解）② |
| 第23回（金曜⑫） | 文字・読解、聴解 第9・10・11・12週（聴解）② |
| 第24回（木曜⑫） | 文法、読解 第5・6・7・8週（読解）③ |
| 第25回（金曜⑬） | 文字・語彙、聴解 第9・10・11・12週（聴解）③ |
| 第26回（木曜⑬） | 文法、読解 第5・6・7・8週（読解）④ |
| 第27回（金曜⑭） | 文字・語彙、聴解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第3回（文字・語彙、聴解）と解説 |
| 第28回（木曜⑭） | 文法、読解 日本語能力試験（JLPT）N1模擬試験第3回（文法、読解）と解説 |
| 第29回（金曜⑮） | 文字・語彙、聴解 期末試験（文字・語彙、聴解）および試験解説 |
| 第30回（木曜⑮） | 文法、読解 期末試験（文法・読解）および試験解説 |

図2 2023年度後期開講「日本語Ⅱ」シラバス（抜粋）

2.2 受講者

本研究は、2023 年度に入学したすべての留学生を対象とする。前期「日本語Ⅰ」の受講者は、1 年生 8 名（国際 6 名、経済 2 名）、4 年生 1 名（経済 1 名）の計 9 名だった。後期「日本語Ⅱ」の受講者は、1 年生 8 名（国際 6 名、経済 2 名）、4 年生 5 名（経済）計 13 名であった。「日本語Ⅱ」では複数の 4 年生が受講しているが、すべて経済学部 of 学生である。経済学部では 2022 年度まで各半期科目「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」「日本語Ⅳ」を開講していた。上記の 5 名は、国際学部の科目の枠組みに対応して木曜 5 限クラスと金曜 1 限クラスを履修している。

「日本語Ⅰ」の初回の授業では、受講者の 1 年生 8 名に N1 レベルの模擬試験を実施した。その結果の平均は 50% の得点にも満たなかった。入学した時点で、全体として N1 レベルには届いていないことが窺えた。

受講者の 1 年生 8 名のうち、N1 に合格して本学に入学したのは 1 名である。また、後期「日本語Ⅱ」木曜 5 限クラスで聞き取りした結果、経済学部 4 年生 5 名のうち N1 に合格しているのは 3 名だった。2023 年度の日本語能力試験の結果、N1 に合格した 1 年生はいなかった。

2.3 授業で重視したこと

毎回の授業では、留学生自身による「振り返り」と、「安心して話せる場作り」を積極的に取り入れることとした。

授業の初めに行う小テストは、2022 年度までの日本語科目でも毎回実施されていた。一方で、留学生自身が学びに対して自ら振り返る機会は設けられていなかった。大学の授業では、受講後にリフレクションペーパーを書かせることが一般的である。この授業では、リフレクションペーパーという位置づけながらも、予習時間や、その日の授業で新しく学んだことなど、同じ項目を毎回記録させた。この定点観測的な振り返りにより、学生は 1 週間の自分の学習を振り返ると同時に、学習の成果を実感し、次に向けての目標を立てることができる。

安心して話せる場作りとは、留学生が自分の話す内容、話し方、日本語の

間違いに対して、不安や恐れを持つことなく、自分が話したいことを安心して教員や他の留学生に話すことができるように、教員が促したりさまざまな工夫をしたりすることとした。留学生が安心して話せる場が必要だということは、筆者（長谷川）が2022年度に留学生専用の「1年次基礎演習Ⅰ」を担当した経験に基づいている。入学後の留学生たちの中に、毎週授業が終わるとリラックスした様子で自分の話をする学生がいた。くつろいだ会話の中に、留学生自身の色々な側面を知る手がかりがたくさんあり、自分のことを理解してほしいという積極的姿勢も受け取れた。安心して自ら話すことのできる場を留学生は求めていると考え、今回は場作りを重視して取り組むこととした。

3. 授業から見たこと

3.1 振り返り

授業では、毎回の授業で振り返りシートを記入させた。振り返りシートは、①1週間の学習時間と学習方法、②小テストの得点、③小テストを振り返ってのコメント、④新しく学んだ語彙・表現・文法を書くものとなっている。実際の振り返りシートを図3に示す。

この振り返りシートにより、学生は1週間の自分の学習を振り返ると同時に、自分の小テストの結果を確認した上で、次に向けての目標を立てることができるようになっている。

日本語Ⅰ振り返りシート		学籍番号（ ）		名前（ ）	
第（ ）小テスト					
①1週間の学習時間 学習方法					
②小テストの得点	問題1	問題2	問題3	合計	
③小テストを振り返って					
④新しく学んだ語彙・表現・ 文法					

図3 振り返りシート

振り返りシートの項目のうち、「③小テストを振り返って」に見られた学生のコメントをいくつか以下に示す。

- (1) 勉強時間は足りないと思います。今度もっと勉強します。
- (2) 最近は点数が悪くなって、今度は頑張ります。
- (3) 難しかった。でも、間違った問題から新しい単語を学んだ。
- (4) カタカナを読むことができるんですが、意味が分かりません。
- (5) 同じ単語いろいろな意味がある。たまに困るんです。

学期を通して、(1) や (2) のように、小テストの結果から自らの学習時間の反省や、次回に向けての意気込みに対する記載が多く見られた。加えて、(3) (4) (5) のように、その結果を踏まえて、自分の弱点を把握している様子が窺えるコメントもあった。

さらに、毎回の授業振り返りシートとは別に、前期の最終授業日では、学期全体の振り返りとして、「4月から今日まで」というタイトルで作文を書かせた。この作文では、入学からの色々なことを自由に書いても良いこととし、入学後3か月の大学生生活の振り返りも兼ねた。振り返りの作文からいくつか、以下に抜粋して示す。特に大学生生活の様子や彼らの心情が具体的に書かれている箇所には下線を引いた。なお、作文は日本語の間違いを含んでいるが、留学生の声を届けるべくそのまま掲載する。

【学生 A】

(略) 敬愛大学に入って今まで4か月に経った。早いですね。千葉県に引っ越しするときはどきどきでした。大学は単位をとる環境ですから、自分はとれるかどうか、クラスメートは若い、一人暮らしは寂しい、生活が大変など不安しました。最初大学に入っているいろいろな問題があったです。私はパソコン得意ではないので、KCN で科目を申し込むのは大変でした。さらにガイダンスで先生たちから教えてもらったが、留学生に対してそれほど早く説明してあげても分からない問題がたくさんがあ

ります。経済学部は生徒の 200 人ぐらいけど、留学生は 2 人います。日本語のクラスで外国人がおおくて話して嬉しかったです。(略)

【学生 B】

4 月に初めて大学に入る時間だ。最初からわくわくという感じがあって、大学に入ってから、新しいことに会って、新しい友達に会って、いい印象と思う。でも、その中に一番いい印象を持っているのは大学の同級生のやさしさだと思う。なぜなら、大学に入ったとき、日本語が苦手でガイダンスに参加しても、いろいろな情報を見落とし、結果、どのクラスを勉強しないといけないか分からない。その日 1 人で困っていた。でも、私は偶然に日本人の友達に聞いて、最初から断られると思っても、その人からちゃんと手伝い教えることをもらった。都合が良いと思う。その事件は一番いい印象と思っている。5 月に入ると、ストレスを初めて感じる。なぜなら、大学の授業で、難しい科目があるし、難しい科目もあるし、でも、各科目が論文を書くとか、発表とか、いろいろなテストをやるとか、いろいろなことがやらなければならないが、頭に入れない。ストレスが少し詰まって、でも、私のまわりは友達がいる。大学だけでなく、アルバイトで仲良く友達がいるし、困難を共有されて、良かったと思う。それに、こんな時間では、新しい友達を使った、毎日しゃべって、圧迫感も少なくなる。(略)

【学生 C】

大学に入学して始める時には 4 月です。4 月から今までは 3 月ぐらい経ちました。私だけではない、ほとんどの留学生は大学に入学するときにたくさんの困難や面白いことを経験ことがあると思います。自分にとって、日本語学校で 2 年間、日本語を勉強すれば、大学の授業内容を理解してコミュニケーション取れる程度の言語知識は身につくと思いましたが、実際、そうでもなかったです。日本人友達や教師と話す場合、会話の内容はほとんど理解できませんでした。すごく言葉と文法を以前勉強

したことはありません。授業の内容は先生が速く話して、漢字が難しく、課題が多くて、私がストレスが溜まると感じます。大学での知識について身につけるために、一生懸命勉強し、たくさん考えなければなりませんでした。(略)

【学生 D】

(略) 今年、留学生があまりいないですので、授業にほとんど自分だけは外国人です。日本人と友達にならないかならないと思っています。私のイメージは日本人が冷たい人です。授業をする時、分からないことがあったら、どうすればいいのか全く分からないので、日本人と友達になるしかないと思いました。そのため、自分は日本人と話しかけました。思ったより悪くないと感じました。その子と友達になりました。嬉しかったです。皆は全部優しい子です。私たちは焼肉で食べに行きました。楽しかったです。嬉しいことばかりではなく、辛いこともあります。一番の理由は自分の日本語の能力だと思っています。授業に参加する時、グループに分けてやって、日本語が分からなくて、ずっと謝って、その時、本当に無力感を感じました。でも、皆はゆっくり教えてくれてありがたいです。(略)

クラス全体では、ここで挙げた学生らの作文のように、入学前の不安と期待、入学後に直面した困難に対する思いが書かれているものが大半であった。留学生は全国の様々な日本語学校を卒業して大学に進学する場合が多い。これまで住んでいた地域から引っ越して千葉県にくる学生もいるため、知り合いのいない地域での一人暮らしに対する不安や、友人ができるかどうかといった不安を抱えながら入学する。そして、入学後に彼らが直面するのは、専門書などの読み方、講義の聞き方、レポート・論文の書き方、発表などのプレゼンテーションの方法といった、いわゆるアカデミックスキルが必要とされる場面である。さらに、学生 A のように、学生や教職員等が利用できる教務情報ポータルシステムである KCN (Keiai

Campus Navigator) の使い方につまずく学生もいる。

留学生が入学前後に抱える不安や困難は、留学生以外の学生にとっても同様に感じることもあるだろう。特にアカデミックスキルは、大学での教育を通して身につけるものであり、入学時点でそれらのスキルに自信がないのは当然である。しかし留学生は、それらの困難は自分の日本語能力が至らないことに起因すると考える傾向がある。日本語能力の至らなさに目がいってしまい、学ぶべきアカデミックスキルではなく日本語能力の向上のみに力を注ぐことになってしまう。大学で求められるアカデミックスキルとは何かを理解した上で、日本語能力も同時に向上させることを考えていくべきである。そのためには、入学後はもちろんのこと、入学前から、アカデミックスキルに関する講義を提供するなど、勉学へのアクセスが容易になるようなサポートの必要性が指摘できる。

一方で、留学生は困難に直面しながらも、学内外で友人を作り、困難を乗り越えている様子が作文からも窺える。学生の作文から見えるのは一面的ではあるが、入学後のさまざま経験や思いを振り返っている。各回の振り返りだけでなく、少しまとまった期間を振り返ることで、自分の経験や思いを吐き出せる場として、この作文の意味は大きかったように思う。

3.2 安心して話せる場作り

何をすれば留学生が安心して話せる場が作れるのかについては、確立した方法があるわけではなく、毎回の授業の中でできる工夫を試すことを繰り返した。中でも心がけたのは、授業内でテキストの学習を個々に進めている間に筆者が机間巡回し、必ず留学生一人ひとりに話しかけて、会話する機会をもつことであった。もちろん、安心して話せる場を作ろうとしても、すぐに留学生の方から積極的に話すわけではなく、筆者は留学生が話そうとして日本語が出てくるのを待ち、彼らのことばに耳を傾けた。何よりも、一人ひとりの様子をよく窺った上で、筆者が会話を強要することのないようにし、話す内容を決して否定せず、そのまま受け止めるよう努めた。留学生たちが話したい気持ちを強く持っていることが察せられる時に

は、思い切ってテキストの学習を止め、クラスで自由に話をする時間をもつこともあった。

後期「日本語Ⅱ」は、個々に学習を進める時間をとったため、ゆとりをもって声をかけることができ、次第に留学生から色々な話をするようになった。留学生から出てくる話題は、大学生活、授業、アルバイト、経済的状况や困っていること、トラブルなど、多岐にわたった。留学生が解決できない悩みを打ち明けた場合には、内容から状況がどれぐらい緊急であるのか、また深刻であるかを踏まえつつ、個別的に留学生の相談に乗った。安心して話せる場作りを促したことで、留学生が自分の抱える問題を他者に共有できたのだとすれば、別の視点からは、困りごとに直面した時、誰にも相談できず留学生が一人で悩んでいる姿が見えてくる。ここでは、安心して話せる場作りがもたらしたと考えられる事例について、2つのエピソードを取り上げ、3.1で示した「4月から今日まで」の作文の内容と照らし合わせながら考察する。

【エピソード1 学習上の困難を共有する場】

2023年11月、4週にわたり対応したエピソードを以下に時系列で示す。
3.1で挙げた学生Aから学生Dについて記述する。

一週目

学生Bが筆者に「この曜日は授業が大変なので、大学に来たくないんです。」と打ち明けた。ある授業の配布資料の日本語と内容がとても難しく、その場で辞書を引いても、未知語が多すぎて理解が追いつかないという。授業の場で内容をまとめ、発表しなければならないので、何もできないことが恥ずかしく、毎回つらいとの話だった。同じ授業を受けている学生Cも同様の悩みを持っていると話した。筆者は、次のクラス時にその資料を見せてほしいと伝えた。

二週目

学生Bと学生Cが持参した資料を見ると、彼らの日本語レベルでは理解困難な内容と分量であった。事前に資料がもらえれば週末に自分で調べ

るという。筆者は、予習のために前週までに授業資料をもらいたい旨を、彼らから担当の先生に伝えることを提案した。

三週目

学生 B と学生 C からは、先生からは最新の情報を扱うため事前対応が難しいとの回答だったが、今の彼らの参加状況は問題ないとも言われたとのことだった。筆者は、学生 B と学生 C がその授業を理解し、参加するための手段として、資料のプリントの文章をテキスト化する OCR 機能をもつスマホアプリと、テキスト化した日本語を留学生の母語に翻訳できるスマホアプリの情報を提供した。

四週目

その結果、学生 B と学生 C は、アプリの活用で母語で内容がつかめれば、授業時間内に日本語でまとめたり、発表したりできると納得した。

学生 B の作文には「大学の授業で、難しい科目があるし、難しい科目もあるし、でも、各科目が論文を書くとか、発表とか、いろいろなテストをやるとか、いろいろなことがやらなければならないが、頭に入れない。」、学生 C の作文には「授業の内容は先生が速く話して、漢字が難しくて、課題が多くて、私がストレスが溜まると感じます」との記述がある。

二人とも、大学の授業で随時行われる文章作成、発表、テストに対応したいという意識を持っている一方、課題の量や内容の難しさ、教師の話し方、漢字の理解が高いハードルになり、ストレスがたまっている状態にあることがわかる。エピソード 1 は 2023 年 11 月の出来事であった。つまり、入学後の長い期間、大学の授業についていこうとしながらも、解決できない悩みを 11 月まで抱えたままになっていたということである。1 年生の日本語レベルを考えると、同じ悩みをもつ留学生は少なくないと予想され、留学生が安心して話せる場があることは非常に重要だと考える。

【エピソード 2 学内の情報を共有する場】

2024 年 1 月のエピソードについて記述する。

筆者が学生 A、学生 D と会話していると、もっと英語を頑張りたい

との話が出てきた。そこで、大学では定期的に TOEIC 対策講座が行われていることを筆者が話すと、彼らは非常に驚いて、他の留学生たちに TOEIC 対策講座を知っているか聞いた。すると、誰もそのことを知らず、留学生たちからは、知っていたら受けたかったとの声が多く上がった。

このことから、留学生たちが英語の力を向上させたい、学びたいという強いニーズを持ちながら、大学が在学生に提供している英語講座の情報が届いていない現状が見えてくる。

学生 A は作文の中で、「最初大学に入っているいろいろな問題があったです。私はパソコン得意ではないので、KCN で科目を申し込むのは大変でした。さらにガイダンスで先生たちから教えてもらったが、留学生に対してそれほど早く説明してあげても分からない問題がたくさんあります。」と記している。パソコンの操作の困難さや、ガイダンスでの日本語での説明の分かりにくさが、学生 A にとって必要な情報を得て理解する上で大きな壁になっていることがわかる。一方、学生 D は作文に「日本人と友達になるしかないと思いました。そのため、自分は日本人と話しかけました。思ったより悪くないと感じました。その子と友達になりました。嬉しかったです。皆は全部優しい子です。私たちは焼肉で食べに行きました。楽しかったです。」と記している。学生 D は自ら日本人学生に声をかけ、友達を作っていく力を持ち、積極的に自分で問題解決していこうとする留学生である。そうであっても、大学が在学生に提供する情報を自ら得るには至っていない。

このエピソードからは、留学生に対してどうすれば適切な情報提供ができるのかを考える必要が示唆される。

情報提供に関連すると、現在は大学学生支援室の職員 1 名が留学生の個別対応にあたっている。在籍管理に関する情報収集や助言、奨学金制度の手続きもこの学生支援室で行われ、一人ひとりにきめ細かく対応している。一方、教務に関することは、大学修学支援室が日本人学生と同様に個々の留学生に対応している。各種の手続きや届け出、履修に関する相談など、広く学修上の対応を行っている。

このように大学として留学生対応のシステムがあり、対応窓口や担当者もいる中で、留学生たちが安心して話せる場、よりどころはどこにあるのか、そのような場があるのか、考える必要があるのではないだろうか。

4. まとめと今後に向けた課題

本研究では、振り返りと安心して話せる場作りを重視した実践を行った。その結果は以下の2点にまとめられる。

- ①各回の振り返りと、ある程度まとまった期間の振り返りは、学生に自身の学びを振り返ると同時に、今後への学習意欲を確認する機会を与えることができた。
- ②安心して話せる場作りは、学生に自身の思いを吐き出させる場であると同時に、問題解決につながる力を引き出し、安心した学生生活につながる情報が提供できる場でもあった。

以上のことから、これからの敬愛大学の留学生教育のために必要なことを述べる。図1で示したように、本研究が対象とする2023年度に関しては、新型コロナウイルス感染症による国内留学生数の激減の影響を非常に大きく受け、入学した留学生はこれまでに経験したことのない少人数となった。しかし、2024年度には再度増加に転じる見込みである。受け入れる留学生数が増加すれば、留学生の実態について教職員間で「共有」「知る」という行動がこれまで以上に必要となる。1年次での教育や対応はきわめて重要であることは言うまでもなく、留学生に4年間で何を修得させたいのか、どんな学びの機会を提供するのか、将来の出口に向けて何を準備するべきなのだろうか。

以下に、筆者らが考える、入学前と入学後に必要な主な留学生教育について記す。

【入学前】

・ 留学生のためのプレカレッジの開催

入学後必要になるアカデミックスキルの意識づけにより、勉学へのアクセスが容易になるサポートを行う

・ 入学決定者を対象とした交流会の開催

入学前から安心して話せる場やコミュニティ作りをサポートする

・ 学部間の連携および部署間の連携

教員及び職員が入学決定者の情報を共有し、入学までに個々の学びのサポート体制を整える

【入学後】

・ 留学生の学びを支えるチューター制度の創設

留学生が安心して学べると同時に、本学の日本語学習支援者養成プログラム修了者が実際に学習支援に携わる機会を提供する

・ 4年間を通したつなぎ目のない学びの提供

日本語能力の向上と、アカデミックスキルを修得する学びの体系を整える

・ 出口を意識したキャリアサポート

個々の留学生の希望や適性に合わせた就職支援を行う。必要に応じて、彼らの母語で対応できるスタッフを配置する

以上のように、留学生には入学前から入学後、そして4年間を通して安心した学生生活が送れるように、多くの目でサポートすることが必要である。そのためには、大学組織内の連携を一層図り、持続可能な留学生教育を展開することが求められる。

(参考文献)

- [1] 家近亮子 (2023) 「『国際研究』第36号発刊に寄せて」 特集「留学生の日本語教育の歴史と課題」 敬愛大学国際研究第36号、敬愛大学国際学部、pp.1-2.
- [2] 土弘信彦・工藤達雄 (2023) 「日本の留学生政策の現状と課題－留学生就職促

進教育プログラム認定制度（文部科学省）に向けた本学の取り組み」特集「留学生の日本語教育の歴史と課題」敬愛大学国際研究第 36 号、敬愛大学国際学部、pp.41-62.

- [3] 長谷川頼子（2023）「日本語教員養成課程を修了した留学生の進路選択」特集「留学生の日本語教育の歴史と課題」敬愛大学国際研究第 36 号、敬愛大学国際学部、pp.23-40.